
世界で一番恐ろしいものは？

TuziKa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番恐ろしいものは？

【Nコード】

N7240X

【作者名】

Tuzika

【あらすじ】

「世界で一番恐ろしいものはなんですか？」

さあ、あなたはこの問いに、どんな答えを返しますか？

ヤンデレが苦手な方には閲覧をオススメしないかもしれません

神聖な炎の儀式

” 世界で一番恐ろしいものは何だと思えますか？

きつとそれは、あなたのすぐ傍に

あるのです ”

それはそれは、下らない本でした。

だから、私はその本を投げ捨てたのです。

本は壁にぶつかり、断末魔を上げ、ばらばらになってしまいました。

そんなことは、別にどうだっていいのです。

学校帰り、たまに寄る古本屋さんがあります。

本を読むのは好きでもないですが、だからといって、嫌いなわけでもありません。

なので、たまに本を読むことにしていました。

目安としては、一月に二冊読むか読まないかというところでした。

前に買った本を読んでしまったので、新しい本を探しに来たのです。狭い店に置かれた大量の本棚、その本棚に詰め込まれた大量の本。

頭がくらくなります。どれを選んだらいいのか、ちつとも分かりません。

なので、私はいつも適当に本を取ることにしていました。

店の中を気ままに歩き、何も考えずに足を止め、目の前にあった本を取るのです。

それがこの本でした。

題名は「世界の恐ろしさ」。

時間を潰して読む以上は、面白くあつて欲しいものです。そんな期待をしていた私が間違えていました。

出だしの一文、そこで私の気持ちは萎えてしまいました。

何が気に食わなかったのかは分かりませんが、分かりませんが、とにかく、萎えたのです。

そこから先の頁は面白かったかもしれませんが、でも、もうばらばらなのです。

こうなってしまったら、いつもの儀式を遂行するしかありません、すなわち。

「焼いてしましましょう。」

私は、読み終わった本を焼いてしまうことにしていました。

なぜって、本を書いた人の心までも焼いてしまえそうだからです。決して触れることの出来ぬ人の心。私は、本を通じてそれを壊すことが出来るのです。

3

勉強机の上に立てかけてあるものがあります。

それはクッキー缶でした。

少し大きめのクッキー缶は、燃えることもなく、炎が外に出ることもなく、欠片もあまり飛ばず、とても都合がいいのです。

クッキー缶を部屋の真ん中に置き、私はばらばらになった本の回収に向かいます。

本の見た目は、改めて見るとひどいものでした。

表紙は色あせていて、頁は黄ばんでいました。折れたページ、破れたページ。

作者の心すら色あせ黄ばみ、ぐちゃぐちゃになっているようで、私はぞくりとした快感を覚えます。

震えかける手で、頁の一枚を摘み上げました。そして、くるくると巻いて、真ん中ほどで折りました。

くの字型の紙の筒を頁で作っていくのです。作者の心を折っていく快感。

脊髓を伝って快感が脳に届く。指がびくりと震える。ああ、気持ちいい。

その作業には、三十分ほどかかりました。その間、私は何度精神的な絶頂を迎えたでしょう？

ぬるりと滑る下着を無視して、私はクツキー缶の底に、本の表紙と背表紙を詰め込もうとしました。入りません。

しょうがないので、鋏で滅茶苦茶にしました。ぞくぞくと脊髓を走る快感。

滅茶苦茶の表紙と背表紙をクツキー缶に敷き詰め、その上に紙で作った薪を並べていきます。

この作業にはあまり時間がかかりません。いつものことです。

そして、部屋の中にそれが出来上がりました。

まるで小型のキャンプファイヤーを彷彿とさせる、ただ、キャンプファイヤーよりもずっと私を高みに押し上げてくれる、素晴らしい存在。

私はそそくさと立ち上がります。儀式の準備をしなければいけないのですから。

まず、ベッドの側の窓を閉めます。そして、勉強机の前の窓も閉めました。

それから、勉強机からライターを取り出すのです。

黄色いライターの中では、たぶたぶと油が揺れています。一度火をつけてみると、赤い炎が1センチほど立ち上ります。

きつと、今の私は笑っているでしょう。楽しみが押さえきれない。思わず小走りでクッキー缶に近づき、私はついに火をつけました。赤い炎が黄色い紙を撫で、あつという間に犯していきます。

黒い煙がゆらりと立ち上るのを見ると、もう我慢できませんでした。

私はベッドに腰掛け、壁に寄りかかります。

大きく足を開くと、学校帰りですから制服のスカートが肌蹴け、特
に選んだわけでもない水色の下着があらわになります。

見事にしみの出来た下着に私は躊躇いなく指を滑り込ませ、そこに、
人差し指を押し込んだのです。

同時に、ぞくりと駆け抜ける快感。待ちわびていたという風に、そ
こは、私の指を抱きしめました。

くちり、くちゆりと、部屋に音が響いていました。

私は、立ち上る黒煙と炎をオカズに、自慰行為に浸っています。

私のそこは、人差し指と中指を貪欲に飲み込んで、なおかつ、もっ
ともつとと快楽を強請っていました。

手のひらは小さな膨らみを押しつぶし、そのたびにびくびくと体が
震えます。

黒煙が天井にぶつかり、とぐろを巻く様がたまりません。

部屋の酸素が薄くなっていく、頭がぼんやりと快楽に支配されてい
く。

自らの意思と関係なく足が跳ね上がるたびに、ベッドが軋みました。

「あ……ふ、あ、あつ……、ん、う……あ……っ。」

知らず知らずのうちに声が漏れ、ベッドの軋む音と、デュエットを
奏でます。

ゆらりと炎から逸れた火の粉が宙を舞い、消えていくのが見えまし

た。 ああ、イキそう。

体が、勝手に反ってしまいます。

そうしようと思つ気持ちは薄いのに、指の、手の動きがもっと早くなっていく。

ぞくぞくと脊髄を駆け上る快樂が私をおかしくしていきます。

びくびくと跳ねる足の先に、まるで膜の張ったかのような緩い違和感。

それは、たちまち甘い甘い快樂へと変わり、私の足を駆け上ってくるのです。

そして、指の差し込まれるそこで、それは弾けました。

世界の全てが私から遠ざかっていく感覚。

ちかちかと点滅する視界で、炎がひたすらに赤く、明るく。

がらりと、窓を開けました。

部屋中に酸素が流れ込んでいくのが分かります。

そのせいか、クッキー缶の炎がひときわ大きく燃え上がり、しかし、燃料不足で消えて行きました。

ふうふうと、荒ぶる呼吸が、なかなか落ち着きません。

でも、これはいつものことなのです。

先ほど自慰行為に用いた右手を舐めながら、もう一度。

それが、私の癖なのでした。

人に言えば、恐らく軽蔑されるでしょう。

私だけの儀式。私だけに許された、最高の快樂。

考えながら、私の体は二度目の絶頂を迎えました。びくびくと体が

跳ねて、空いていたらしい口から唾液が垂れました。

平和に見える日常

男の人には賢者モードというものがあるそうです。

身体的絶頂を迎えた際に、なぜだか心もひどく落ち着くというものだそうです。

私は、それは女にもあると思うのです。

私は、クッキー缶の片付けをすることにしました。

とはいえ、今まで炎が入っていたのです。当然触れば熱く、指先は赤くなってしまいます。

なので、台所に向かい、手を洗うついでに水を汲んできました。

透明なコップの中で、水はゆらゆらと揺れていました。

電気の明かりがちかちかと水面で踊り、美しいと、私は思いました。

クッキー缶の中を覗き込めば、まるで終えた際に手にこびり付く半液体のように、真っ黒の紙の破片が残っていました。

そこに、私は水を流し込んでやるのです。

しゅうと熱い缶が出す喘ぎ声を聞くこと、数秒でしょうか。

音がしなくなったことを確認してから、私はそっと缶に触れてみます。

既に熱の無いことを確認できれば、先ほど開けた窓から身を乗り出し、その水を庭に流し捨てました。

流れなかった焦げは、意図的に残っていた水で流し、もう一度庭に流してやりました。

庭には植えた草やらがたくさんあるので、いくら水を捨てようと、不自然ではないのです。

親も仕事で家には居ないので、この儀式が親にばれるということは

ないでしょう。

周りの家の人から見ても、私が二回から目薬ばりのことをしていると言う風にしか見えないでしょう。

少なくとも、室内で何をしているのか、ばれるわけがないのです。

儀式を終え、片付けも済ませ、ベッドに寝転ぶ私を困らせるものがありました。

それは、生物として仕方のない生理現象。

サルとヒトとの明確な違い。進化した脳が栄養素を欲する　つまるところ、空腹でした。

しかし、私に何か作ろうという気はありませんでした。

別に作っても良かったのですが、面倒だったのです。

立ち上がり、台所に向かい、何かを作るより、枕元に転がる携帯電話を引き寄せるほうが、ずっと楽でした。

そついう時絵シールをわざわざ探して貼った、白の携帯電話です。

蝋燭や王冠や、何となくゴスロリ風に飾られた携帯は、私のお気に入りでした。

片手で開いてみせた私を出迎えるのは、灰色の炭から生える、紫色の炎の写真でした。

なんてことはない炭火を撮ったはずが、紫色に写ってしまったのです。

これはこれでお気に入りなので、待ちうけにしてみました。

その番号を呼び出すには、五秒もあれば十分でした。

発信履歴を開き、一番上を押し、もう一度決定ボタンを押せばいいのです。

それだけで、私は望んだ相手へと電話をかけることが出来ます。

文明の利器とは、素晴らしいものだと思いながら、私は携帯電話を
耳に押し当てました。

「はるー、さっきぶりですね。」

確かに罪悪感があったのだ

そう、確かに罪悪感があったのだ。

学校の終わりを告げるチャイムが鳴り、生徒達がぞろぞろと帰っていく。

「では、私は今日は帰ります。部活、頑張ってくださいね。」

俺の机の横に立っていた少女も、そう告げてさっさと帰ってしまった。

彼女を分類付けるなら、俺の彼女ということになる。

告白したわけでもない、告白されたわけでもない、流れでそうなったのだった。

だから、実は恋人だという感覚はあまりない。

だが、確かに罪悪感があったのだ。

俺だけが残るその机に、ひよこりと寄ってくる人影があった。

「やつほー。彼女サン帰ったみたいだし、一緒に帰る？」

同じ学校なのだから当然なのだが、同じ制服を着た少女である。スクールバッグを脇に抱え、ちゃんと首を傾げる少女に、俺は。

「ああ。」

そう、頷いた。

あの少女は、確かに俺の彼女である。

デートをしたこともある、手を繋いだこともある、キスをしたこともある、それ以上すらある。

彼女が、名前で呼ばれると不機嫌になることを俺は昔から知っている。

ただ、俺には名前で呼ぶようにと強いるのだ。逆に、苗字で呼ぶと不機嫌になってしまうくらいに。

だから、お互いに名前で呼び合っていた。特殊なあだ名も何もなく、昔から変わらず、名前で呼び合っていた。

「ねえ、ねえったら!」

「ん……あ、すまない。何だって?」

「だからさ、今度のデートどこ行く? って。言ってるの!」

そう、彼女と俺は幼馴染だった。

家が近くて、いつもよく遊んでいた。

昔から知っているせいか、俺は、彼女のことを恋人だと上手く思えないのである。

ある日、下駄箱の中に異物を発見した。

それは、所謂手紙というもので、可愛い封筒の中には、これまで可愛い手紙が入っていた。

”今日の放課後、体育館裏に来てくれませんか? 暗くなるまでずっと、待ってます”

そう、ラブレターだった。

「どうかしたのですか？」と尋ねる彼女をはぐらかし、部活があるからと先に帰らせた。

そして向かった先で、彼女が待っていたのである。

そして、俺に告げた。

「ずっと昔からあなたのことが好きでした。」と。

それから、「彼女が居ることは知っています。私は二番目でいい、愛してくれませんか？」と、続けたのだ。

それ以来、俺は二股をかけ続けている。

確かに罪悪感はある。ただ、彼女を、そこまで彼女だと思えたことが無いのである。

仕方ないのでは、ないか。

今度の土曜日、俺達はデートの約束をしていた。

歩きながらでは決まらないということで、入ったハンバーガーショップ。

「ねえ、私映画見に行きたい！」

「映画かあ、いいね。今どんなのがやってるの？」

「私のオススメはね、これ！ 全米が泣いたんだって！」

「へえ……………」

「

仕方ないではないか。彼女があまりにも彼女らしくないのだから。

平和に見える日常

結局、デートは映画とショッピングということに決まった。

なんでも、全米が泣いたらしい。よく分からないが 映画の内容など、どうでもいいのだ。

彼女と手を繋いで見れば、きつとどんな映画だって楽しいだろう、面白いだろう。

だって、彼女とは居るだけで心が弾むのだから。

ワンコインのハンバーガーだって、とても美味しいものに感じられる。

下らない話をして、笑って、それが幸せだと思ふのだ。

そう思えば、彼女との会話はひどくつまらない。

何か話し掛けても、たいてい「そうですね。」などと返されてしまう。

そうなってしまうえば、話が続くわけも無いのだ。

そして黙りこくったまま、何故か手を繋いできたりする。

消極的なのか、積極的なのか、ちつとも分からない。

それに比べ、彼女は。

話し掛ければ、普通に返してくれる。

それだけではない、話し掛けてきてくれるのだ。

これは彼女のあまりしないことで、彼女の方が優れている場所と言えるだろう。

手を繋ぐより腕を組む、軽いキスより深いキス。すべてにおいて、彼女よりも彼女の方が積極的だった。

そこに惹かれたのかもしれない。
もしかしたら、俺は、彼女に飽きていたのだろうか？

話していたら、いつの間にか夕方になっていた。
時間が経つのはあっという間で、もう帰らなくては、という話になったのだ。

「……明日また、学校で、な。」

「もちろん。明日も一緒に帰れる？」

「それは分かん。一緒に帰れたら、帰ろつ。」

「ん。分かった。……………」

彼女が、別れのキスをねだってくる。
やっぱり、罪悪感があった。だが、次の瞬間には、俺は彼女を抱きしめて、キスを落としていた。

彼女と交差点で別れ、家に向かう道中。

じゃーんと流行りの音楽に設定してある着メロが鳴る。着信。

携帯電話が示すナンバーディスプレイは、彼女のものだった。
今別れたほうでは無い、昔よりの、彼女。

気付かれてはいけない、一度咳払いをし、通話ボタンを押して、電話を耳に押し当てる。

「はるー、さっきぶりですね。」

耳に慣れた声が、電話口より響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7240x/>

世界で一番恐ろしいものは？

2011年10月19日04時18分発行